

豪雪地帯 走り

「おさん、木々の緑がきれいだよ」。札幌在住の真嶋一枝さん(56)は深川牛前一時十分発の列車の中で隣の末雄二さん(50)に話しかけた。目の不自由な雄二さんは空知管内幌加内町の出身。一九六四年まで母校・深川牛小中で教壇に立った。「吹雪の中、高校受験生を鉄道で深川まで送ったこともあり、懐かしいばかりです」。雄二さんは目をうつろませた。

深川駅を出て五分もたつと人家はまぼろし。農作業中の人々が列車に手を振る。幌加内町の津村和子さん(62)は「私たちの大切な足

「大切な足だった」

だったけに残念です」と速くを見つめてつぶやいた。午後八時半すぎ、最後の列車が幌加内駅に入った。上りと下りの列車を連結した牛西編成。雨の中、見送りにきた町民の一人が「行かないでくれ」と叫んだ。定刻より十分遅れの午後九時四分、発車の笛が夜空に鳴り響く。ホームには紙テープが舞った。最終列車に乗り込んだ札幌市内のOL(30)は目が真っ赤。「私たち以上に地元の人はずいぶん寂しげで、夜は見えないはずの外をじっと見つめた。」

≪深川、幌加内≫



幌加内駅では、最終列車の出発を乗客と見送りの人が一緒になって惜しんだ

≪午後9時すぎ